

平成28年度 宮崎県立農業大学校 学校経営方針及び学校評価表 (評価結果 3月)

教育目標	方針	平成28年度 重点取組
<p>【自律】経営能力を身につけ、国際化に対応しうる自律心の強い社会人を養成する。</p> <p>【創造】21世紀の農業を拓く、創造力豊かな社会人を養成する。</p> <p>【協調】学校生活を通じ、協調性に富む社会人を養成する。</p>	<p>【就農に自信と誇りの持てる学校】</p> <p>(1) たくましい実践力を備えた即戦力となる農業者の育成</p> <p>(2) 農業大学校で学んだ者が農業に果敢に挑戦できる環境の創造</p>	<p>(1) 入学定員(65名)の確保に努めます。</p> <p>(2) 儲かる農業を実現する確かな生産技術や経営能力を備えた実践力のある農業経営者を育成します。</p> <p>(3) きめ細かな進路指導により学生の100%進路実現を図ります。</p>

<<設置根拠>> (1)農業改良助長法第7条5項の規定に基づく「農業者研修教育施設」 (2)学校教育法第124条の規定に基づく「専修学校」

	評価項目		平成28年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見	
	学校全体	入口対策 (新入生確保)	志願者数の確保	○就農に意欲のある入学者の確保 ○65名定員の確保	【取組】○高校訪問、学校説明会、ガイダンス等により積極的に学生募集を行った。 【成果】○来年度、69名が入学予定である。	A		A
学校PR			○学科改編の周知、教育内容PR ○積極的な情報の発信	【取組】○SNSを活用し、随時、情報を発信した。 ○農業系高校で意見交換会を行い、新学科の教育内容について説明を行った。 【成果】○高校生・高校教員の農大見学数が増加した。	A			
学校教育 (特色ある取組)		教育課程 (講義・実習)	○新たな教育内容の実施に向けた特色ある学習カリキュラムの編成 ○経営を重視した指導体制及び施設の整備	【取組】○新学科・専攻の設置に伴う新たな教育内容を検討した。 【成果】○新教育計画、H29カリキュラムを編成した。 ●食品加工実習施設・設備の整備は、来年度、実施予定である。 ●老朽化した本館や栽培・飼育施設の計画的な更新が必要である。	C	B	・老朽化して施設・設備の更新が進んでいないという意味でのC評価だと思うが、教育の取組としての結果ではないので評価を見直してもよいのではないか。今後の施設整備の見通しはどうか。 ・新カリキュラムは完成したのか。	
		担い手育成事業 (高大連携)	○高大連携事業の推進 (具体的な取組の実施)	【取組】○国庫事業を活用して、連携による先進地視察研修等を行った。 ○高大連携による中学生向けのオープンキャンパスを実施した。 【成果】○高校生が農大生と一緒に研修を行うことで、農大への関心・進学意識を高めることができた。 ●地域連携型コンソーシアム方式によるプロジェクト学習の実施までには至らなかった。	B			・高大連携の成果として、入学者数が増加したのか。 ・この2年間で、連携内容がかなり深まった。在校生も農大校への進学希望者が多い。 ・高校教育の成果が、農大校の教育にスムーズに接続するよう体制を整えて欲しい。
		自治会活動	○自治会活動を通じた学生の自主自立の確立	【取組】○学校行事の企画・運営とその拡充など、学生の主体的な活動に取り組んだ。 ○小学生対象の食農教育活動に取り組んだ。 ○地域行事に参加し、地域との交流を深めた。 【成果】○学生の自主性、自立性や企画・運営力、社会性が身についた。	A			
		寮生活	○寮役員による自治体制の構築	【取組】○役員を中心とした寮運営に取り組んだ。 【成果】○落ち着いた寮生活を送っている。	A			
出口対策 (進路達成)		進路実現	○学生の希望に応じた100%進路実現 ○進路指導体制の確立	【取組】○ハローワークによる定期的な面談を実施し、学生の進路実現をサポートした。 【成果】○53名全員の進路が決定した。	A	A	・法人就農した学生は、その後も続けて就業しているのか。 ・法人を離職する際の理由は何か。 ・一旦就職するが将来、宮崎で就農したいという学生の情報が欲しい。	
		担い手の確保	○スムーズな就農支援体制の確立 ○就農率6割以上	【取組】○青年就農給付金を有効に活用している。 【成果】○就農率68% (即就農6名、法人就農30名)	A			

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

評価項目		平成28年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
各 学 科	学科目標	○将来【土地利用型農業生産法人】 【集落営農法人】、【6次産業企業法人】を、中核的職員として「担う」 または「自ら経営する」人材の育成	【取組】 ○農地所有適格法人や関連企業で、3～5日間の短期実習を実施した。 ○農業機械操作技術向上研修会を実施した。 ○農業検定、農業簿記、危険物などの資格取得対策を実施した。 ○地域イベントで販売実習や消費者との交流を行った。 【成果】 ○2年生14名の内、即就農が2名、法人就農が9名であった。 ○法人就農9名中、3名が研修先の法人に就農した。 ○機械技能系の資格を延べ47名が取得、各種検定に延べ8名が合格した。	A	A	・資格取得一覧は、年度毎のまとめではなく、1年生、2年生毎のまとめとして欲しい。特に2年生については、2年間通しての取得状況をみたい。 ・就農後すぐに役立つ資格を取得させて欲しい。校外研修の際も学生がそのような資格を持っていると研修内容の幅が広がると思う。
	プロジェクト学習	○地域課題に即したプロジェクト課題設定と組合せ、生産部門(大規模経営コース)と加工部門(グリーンライフコース)との連携による【農業生産法人「アグリビジネス学科」】の経営安定	【取組】 ○担当品目毎に、2年生リーダーを中心とした作業分担及び効率的な栽培管理を実践した。 ○本校産の米で米粉パン、小麦でパンを製造した。 ○農大産小麦、米粉、野菜、果樹を活用した加工品の研究及び拡大に、外部助言者の協力を得ながら取り組んだ。 【成果】 ○早期水稲直播栽培での発芽率、生産性が向上した。今後も、さらなる向上を目指して取組を進めていく必要がある。 ○農大パン、キンカン入米粉シフォンケーキ、トマトドレーヌなどのレシピを完成した。	B	B	
	特色ある取組	<<大規模経営コース>> ○市場出荷に加え、地域企業や法人との契約栽培等による、小麦、水稲、露地野菜を組み合わせた経営管理技術の習得 <<グリーンライフコース>> ○校内6次産業化への取組、地域企業や法人との連携、実習による商品開発、マーケティング、流通、製造技術の理解促進	【取組】 ○露地野菜の新品目(スイスチャード、ロメインレタス)を導入し、もち米の栽培面積を拡大した。 ○チャレンジファームにおいて、大型農業機械研修を6回実施した。 ○道の駅「つの」(1回)、川南町軽トラ市(3回)で販売実習を行い、消費者への試作品アンケート調査を実施した。 【成果】 ○庁内企業に、サラダ用野菜の直接販売を行った。もち米は販売量が増加した。(H27 200kg→H28 600kg) ○6回の研修会に、延べ53名が出席し、大規模経営に対する理解度がさらに深まった。 ○試作品5種類のうち、キンカン入米粉シフォンケーキを商品化し、農大祭で販売することができた。	A	A	

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

評価項目		平成28年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見	
各 学 科	園芸経営学科	学科学目標	<p>○経営管理手法の習得</p> <p>○法人経営体を支える人材の育成</p> <p>○即戦力のある人材の育成</p> <p>○多様な品目の栽培管理技術の習得</p>	<p>【取組】</p> <p>○法人、雇用農業は商業簿記、個人経営は農業簿記と学生の希望に応じた複式簿記学習を実施した。営農計画についてグループ学習を実施した。</p> <p>○講義で得た知識を演習で確認する科目「園芸学演習」、篤農技術を学習する新科目「篤農家に学ぶ栽培の実践」を実施した。</p> <p>○農場実習では、これまで将来の経営を見据えた単一品目のみを教材として取り扱ってきたが、今年度は複数品目を教材に取り上げ、幅広い栽培管理技術の習得を目指した。</p> <p>【成果】</p> <p>○商業簿記3級に2名合格した。また、経営分析や営農計画作成の手法を身に付けさせることができた。</p> <p>○講義－演習－実習と、知識と技術の確実な習得を目指した学習により、即戦力を身に付けさせることができた。</p> <p>○卒業生18名中、即就農2名、法人就農11名であった。</p>	A	A	資格によっては、受験者数が少ない合格率が低いなど様々である。受験させるだけではなく、就職後の必要性を理解させ、意識付けを図る必要がある。
	園芸経営学科	プロジェクト学習	<p>○PDCAによる自ら考え取り組む体制の充実</p>	<p>【取組】</p> <p>○プロジェクト中間発表により、Check機能の充実を図った。</p> <p>○2年生が1年生に対し、栽培技術の講義と実習を行うコーチング演習を行った。</p> <p>○プロジェクト学習は、これまでの一人一課題から、グループで地域課題の解決に取り組む体制づくりを行った。</p> <p>【成果】</p> <p>○Check機能を充実したことにより、学生が主体的に栽培計画を作成し、圃場管理に取り組むなど、将来、経営者となるべき認識を強く持たせることができた。</p> <p>○コーチング演習により、栽培管理技術について、より深い知識と教える技術を習得させることができた。</p> <p>○グループで取り組むことにより、学生同士で相互の情報交換を行い、より充実したプロジェクト学習を実施することができた。</p>	A	A	
	園芸経営学科	特色ある取組	<p>○コース、学科を越えた幅広い品目の栽培技術習得</p>	<p>【取組】</p> <p>○1年前期は、コースの枠を越えて、野菜、花、果樹の全分野の栽培実習を実施し、1年後期は、自分が選んだ特定品目以外にも、複数品目の栽培実習を実施した。</p> <p>○校内産の農産物を素材にした加工実習や調理実習、校外での販売実習に積極的に取り組んだ。</p> <p>○高鍋農業高校との連携事業で、先進農家視察研修や首都圏でのマーケットイン研修、先端技術研修等を行った。</p> <p>【成果】</p> <p>○複数品目の栽培実習により、幅広い品目に対応できる栽培技術と即戦力を身に付けさせることができた。</p> <p>○栽培から加工、販売までの学習をとおして、消費者ニーズに的確に対応した栽培を行うことができた。</p> <p>○県内外の視察研修により、宮崎の農業を再認識するよい機会となった。</p>	A	A	

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

評価項目		平成28年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見	
各 学 科	畜産経営学科	学科目標	<p>○即戦力として地域の畜産を担う人材の育成</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○資格取得の促進と進路実現に力を入れて取り組んだ。 ○先進大規模農家、畜産法人、畜産関連企業等と連携し、延べ63か所の研修等を実施した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○21名全員の進路が決定した。内訳は、即就農3名、法人就農11名、農業関連産業3名、公務員3名、進学1名。 ○多くの関連資格を取得させることができた。内訳は、家畜人工授精師21名、家畜受精卵移植師9名、牛2級削蹄師20名、家畜商7名。 ○校外学習により、実践的な技術や経営管理能力を身に付けさせることができた。 ○ヤンマー学生懸賞論文・作文で、銅賞を受賞した。 	A	A	・自主企画研修の成果はどうか。
		プロジェクト学習	<p>○収益性向上を目指した課題設定とプロジェクト学習を通じた生産技術の習得と経営能力の育成（「宮崎県畜産新生プラン」の目指す姿(①生産性の向上、②生産コストの低減、③販売力の強化等)の実現を図る)</p> <p>○コンソーシアム方式による効果的な学習体制の構築</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○①生産性の向上、②生産コストの低減、③販売力の強化を目的とした畜産を目指して、高校、大学、試験・研究機関食品関連企業等の協力を得ながら、連携によるプロジェクト学習や共同研究に取り組んだ。 ○高鍋農業高校と連携で、地元企業等での視察研修を行い、地域課題や乳製品の開発、流通・販売について学習した。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○宮崎大学との共同研究で、「免疫力アップによる和牛子牛の生産性向上」に取り組み、九州農業大学校プロジェクト発表会で優秀賞、全国農業大学校プロジェクト発表会で第3位(特別賞)を受賞した。 ○県内の関連企業等の視察や研修会の実施により、学生の学習意欲と進路意識の高揚を図ることができた。 	A	A	
		特色ある取組	<p>○家畜防疫知識の習得と実践</p> <p>○地域の実務者と連携した効果的かつ実践的な学習</p> <p>○地元企業と連携した乳加工品や精肉等の生産・販売の学習</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○基本的な衛生・防疫に関する知識の習得により、防疫意識を高め、日常の衛生・防疫作業の励行に取り組んだ。 ○乳業メーカー、食肉関連企業、関係法人等の協力を得て、加工、流通・販売に関する学習を行った。 ○良質乳生産牧場の継続認定を目指して、日々の取組に励んだ。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全体的には学生の防疫意識が向上した。しかし、一部では、意識の薄い面も見られたため、今後は詳細にわたるきめ細かな指導が必要である。 ○フードビジネス関連企業等との連携により、6次産業化やマーケットインの考え方に基づく知識の習得、体験をさせることができた。 ○3年連続で、「良質乳生産牧場」の認定を受けることができた。 	B	B	

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)